関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

阿仏尼「いまくまのの百首」における熊野信仰

著者	福留 瑞美
雑誌名	國文學
巻	92
ページ	83-93
発行年	2008-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/1212

阿仏尼「いまくまのの百首」における熊野信仰

福留瑞美

はじめに

平安時代中期から鎌倉時代後期にかけて、熊野詣でが頻繁に行われ、蟻の熊野詣でといわれるほどに多くの人で賑わい、老若男女・貴賤を問わず熊野に参拝した。熊野は山岳信仰や仏教とも結びつき、観音信仰や阿弥陀信仰・浄土信仰の対象ともなる。そういった中、多くの人たちは、「現当二世の安穏」「延命長寿」など様々な信仰を持って、長い道のりを旅するという難行苦行により、その功徳を得よう考えていた。[1]

本稿では、そういった熊野詣でが盛んに行われた時代に生きていた阿仏尼が、どのように熊野を信仰していたかを、『阿仏五百首和歌』[2]所収の「今熊野百首」の和歌を通して見ていこうと思う。

まず、「今熊野百首」については、その端書き[3]に、

又、三月六日か、この後ろの山のあなたに聖福寺といふ所、花の盛りなりと聞きて、山越しにしのびて見やる程に、今熊野おはしましけり。歌を詠みて奉らばやとうち思ひて、ただ伏し拝み奉りて、帰りぬ。その後、なにとなくて過ぐす程に、あやしく身におはぬ瘧病みをしいだして、二起こりといふ日、いとわびしく消え入りぬべく覚ゆる心地に、なにとなく思ひあはする事ありて、よくなりたらば今熊野にも百首詠みて奉らんと思ふほどに、三起こりになるべき日、経など読みて手づから落としつ。そののち、百首始めて詠む。

とあり、跋文には、

弘安三年三月廿五日の酉の時より始めて、そののち三夜の宵々に詠み果てつ。同廿八日清書して、卯月の一日奉りつ。

とある。

以上などから、島津忠夫氏が指摘されている[4]通り、阿仏尼の鎌倉滞在地（月影の谷）の近くの聖福寺から山越しに望める所に今熊野社が鎮座していた。そして、阿仏尼が鎌倉に着いてからは翌年にあたり、弘安の役からは一年前にあたる弘安三年四月一日に奉納された堀河百首題による百首が、「今熊野百首」である。

一、「今熊野百首」の歌枕

奉納和歌の特徴として、寺社と縁のある地名を詠み込むことが指摘できる。ここでは、当該百首における歌枕を通して、阿仏尼の熊野信仰を見ていこうと思う。

まず、当該百首の歌枕を全て挙げると、

由良紀伊・藤代紀伊・紀川紀伊・千里浜紀伊・逢坂近江・向岡武蔵・吹上浜紀伊・宇治山城・宇多山城・信夫陸奥・中川山城・逢坂山近江・高砂播磨・和歌浦紀伊・三つの深山路紀伊・岩田川紀伊・岩代紀伊・葛城大和・紀伊海紀伊・那智山紀伊

の二十例ある。そのうち、熊野に縁の地と思われる歌枕は十二例である。まず、阿仏尼の夫である藤原為家の「良守法印勧進熊野山二十首和歌」[5]の十三首と比較する。そこでは、熊野に縁のある歌枕は七例あり、以下の通りである。

岩田川・岩代・和歌浦・藤代・信田森・三つの鏡・那智滝

このように為家の十三首中七例と比べ、当該百首で百首中十二例というのは少なすぎる。『阿仏五百首和歌』全体に言えることであるが、他歌人の奉納和歌と比べて奉納先の神社に関する歌枕の詠み入れが少ない傾向にある。奉納和歌における歌枕の制約をあまり気にしていないようであるが、これは、阿仏尼の場合、奉納先が本社ではなく、勧請された社であったためであろうか。

次に、当該百首の熊野に縁のある歌枕を詠み入れた十二首を挙げる。

7立春　きのくにやゆらのうら風しづかにてかすむみなとにはるたちにけり

24藤　ひとしほのみどりのほかも色やそふ花さくはるのふぢしろの松

35五月雨　さみだれにきの川なみのはやき瀬も神のしるべの舟はさはらず

42初秋　浦かぜもふきかはるなりはる〳〵とち里のはまに秋やたつらん

68千鳥　はま風のふきあげのちどり心あらばのこるむかし

の跡をわするな

91鶴　わかのうらのかひあるかたにたちかへれむかしの跡のたづのもろ声

92山　しらせばやねがひをみつの太山ぢにまだふみゝねどかよふこゝろを

93河　いはた川いはずともたゞくみてしれわたらぬさきにおもふ心を

94野　いはしろのゝなかのまつのちぎりこそむすびしまゝにかはらざりけれ

96橋　かづらきの神はゆるさぬいはゞしをいくとし月かきゝわたるらん

97海路　はるゞ〳〵ときのうみとをくこぎいでゝなみまほのかにわたるふな人

106祝　神の名もたかくきこゆるなち山によろづ代ながきたきのしらいと

7番歌「由良」は和歌山県日高郡由良町あたりの海岸。24番歌「藤代」は和歌山県海南市藤白で、九十九所王子の中でも格の高い五体王子の一つ「藤代王子」がある。35番歌「紀川」は大和の吉野川の下流にあたり、大和から紀伊へ通ずる道沿いの川である。白河院近臣の藤原為房は川を渡る際に御祓を行っている（為房卿記）。42番歌「千里浜」は和歌山県南部町付近の海浜。68番歌「吹上」は紀川の河口付近一帯の海岸。91番歌「和歌浦」は現在の新和歌浦の東南に位置する玉津島神社のある付近で、藤代からは西北に望む浦であり、その名から「歌道家」の意が掛けられている。92番歌「三つの深山路」は、熊野坐神社（本宮）・熊野速玉大社（新宮）・熊野那智大社（那智）の三社（熊野三山）へ続く熊野古道のことであり、「（願ひを）見つ」と「三つ（の深山路）」が掛けられている。

93番歌「岩田川」は現在の富田川のことで、参拝者が御祓をする川であった。二句目「いはず」を導く同音反復の序詞として用いられている。94番歌「岩代」は、和歌山県南部町岩代で、

岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへりみむ

（万葉集・巻二・一四一・有間皇子）[6]

などのように、「松」とともに詠まれることが多い。

96番歌「葛城」は大和の歌枕であるが、この地は大和から紀伊へ越える道が通過する用地であり、葛城山から吉野の金峰山にかけるという岩橋伝説や、吉野から熊野への行者道があったことからも、葛城は京の人からすれば、熊野に縁のある地と思っていたと考えられる。97番歌「紀伊海」は紀淡海峡から紀伊水道に掛けての海のこと。106番歌「那智滝」は、死より蘇るとい

う大己貴神が那智大社に祀られ、延命長寿の信仰対象として有名であり、そのため「万代ながき」とともに詠まれたとも考えられる。

熊野詣での古道は、和泉から紀州海岸に沿う「紀路」、伊勢から新宮に至る「伊勢路」、大和から果無山脈を越す「小辺路」、吉野から大峰山を越えて本宮に出る行者道など様々あったようであるが、平安時代末頃の参詣には紀路と伊勢路が一般的であり、院政期以降の公的な参詣はすべて紀路を通っている。[7]

以上のことから、当該百首の奉納先は、熊野大社を勧請した鎌倉の今熊野社であるが、これらの歌枕から見ると熊野大社に詣でることを想定して詠まれていると言える。

また、歌題の順により実際の道順とは前後するが、「紀路」を想定している。紀伊海・吹上浜・和歌浦・千里浜は紀路沿いの海や浜であり、紀川や岩田川は参詣者が御祓をする川であり、それらの川の間に位置する藤代・岩代・千里は九十九所王子社がそれぞれ存する地である。それらを通る熊野三山への道（三つの深山路）をたどって、最後に那智山の滝に着く。このように歌枕の上で、紀路の熊野詣でを疑似体験していると言えよう。

熊野信仰と言えば、その多くは、七十里以上の難行苦行の旅をすることにより、現当二世の安穏などを求めるというものであった。しかし、92番歌「まだふみゝねどかよふこゝろを」、93番歌「わたらぬさきにおもふ心を」という表現を見る限りでは、阿仏尼は実際に熊野詣での経験はなく、その上、鎌倉という遠くで祈る願い事を叶えて欲しいという、遠隔地からの祈願成就を願っている。これは、『新古今集』神祇・一八五九に、[8]

道とをしほどもはるかにへだたれり思ひをこせよわれも忘れじ

この歌は、陸奥に住みける人の、熊野へ三年詣でんと願を立ててまいりて侍けるが、いみじう苦しかりければ、いまふたゝびをいかにせんと歎きて、御前に臥したりける夜の夢に見えけるとなん

とある和歌と同じような信仰によるものと思われる。この『新古今集』の和歌について加藤隆久氏が、「願をかけたからといって、遠隔の地からわざわざ苦しんで参詣に来る必要もなく、その地で熱心に神を念じれば、信者の『まこと』を神が汲み取り叶えてくれるという信仰を歌っている。前述したごとく、熊野神は苦しむ神であり、人々の苦しみを代贖される神とされていた。こういう神であるがゆえに、己の苦悩を神に贖いまかせて自分の安穏を願い、熊野神の寛容性に期待を持ったのであろう」[9]と記している。こういった信仰（神の啓示・神託）を意識

して、92・93番歌は詠まれたと思われる。

二、祈願内容

ここでは、当該百首に詠み込まれた祈願内容を見ていくことにより、阿仏尼の熊野信仰の内容を確認していくことにする。

1、思ひの強さ・希望

先に挙げた92・93番歌に見たように熊野に対して鎌倉という遠隔地から願うというものや、

18春駒　春こまのつなぎがたきもよそならずあるゝこゝろは身にもしられて

40泉　しらせばやいずみの水のわきかへりおもふこゝろはあまりこぼるゝ

74炭竈　すみがまのしたのおもひにかくれなくゆきをしのぎてたつけぶりかな

とあるように、阿仏尼の中にある激しい思いやあふれるほどの強い思いとは、いったい何か。

もちろん奉納和歌である以上、先に挙げた96番歌「いくとし月かきゝわたるらん」や、

32早苗　かねてより山田のさなへとるてにもあきのはつほぞみる心ちする

67寒蘆　をく霜に人めばかりはかれあしのしたねかはらではるや待らん

とあるように、祈願成就を信じて明るい未来（実りある秋や春）をこいねがうというのは当たり前であるが、それよりも具体的な祈願内容として、まず挙げられるのは、鎌倉下向の原因ともなった、家の存続とも関わる訴訟の存在であろう。

細川荘をめぐって二条家と争われたのは有名なことで、それらと関連した内容の和歌表現とは、どのようであろうか。

2、歌道家の隆盛

68千鳥　はま風のふきあげのちどり心あらばのこるむかしの跡をわするな

91鶴　わかのうらのかひあるかたにたちかへれむかしの跡のたづのもろ声

98旅　えぞしらぬならはぬ旅のくさまくらあらしのとがにいまいく夜とも

68、91番歌では、歌道家の現状が為家の生前の頃とは異なってしまったことから、昔を「忘るな」、昔に「立ち返れ」と原

状回復を願うものである。[10]「藤原為家譲状」[11]などによっても荘園や書籍類は為家から正式に譲られたという思いが阿仏尼にはあり、98番歌「あらしの咎」ということで、自身には罪はないことを表し、正当であることを示している。しかし、訴訟が起きたということは納得いかないことであり、為家生前の状態に歌道家である御子左家を戻さなければならないという信念があった。そういったことから、歌道家を昔の状態にしたいという願いを、68、91番歌のように「昔の跡」という表現に込めて詠んでいる。

24藤　ひとしほのみどりのほかも色やそふ花さくはるのふぢしろの松

59菊　うへをきしかきほあらさでおなじくはちよをかさねよしらぎくの花

89竹　つゐにまたうれしきふしもこもるらし人こそしらねやどのくれ竹

24番歌では、常緑の松に寄り添う藤に、藤原氏である御子左家を重ね合わせて寿いでいる。59番歌は、我が家の垣根に延寿の効といわれる菊が千代を重ねることを願う和歌であるが、庭の菊が千代を重ねるためには、その家が千代を重ねなければ続くはずもないわけであり、この和歌も家の繁栄を願っていると言える。89番歌では、宿の竹にうれしいことが籠もるということであり、つまり我が家にとって良いことがあるということを詠んでいる。

8子日　もろ人もきみをぞいのる春ごとに松のねの日の千代をかさねて

これは、千年続くようにと、安泰な世を願う歌である。安寧があってこそのこの世であるため、このように詠まれることは当然のことではあるが、俊成や為家の奉納百首[12]と比べると、「君」や「御代」などを詠み込んだ歌は少ない。阿仏尼が執着していたのは、何よりも家の安泰であったためであろうか。

以上、右に掲げた和歌のほとんどは、歌道家が現在よりもよりよい状態になることを願うというものであった。しかし、当該百首の全体を通して見る限り、窮状を訴えているものが圧倒的に多いように思われる。[13]

では、一体、阿仏尼はどのような窮状に置かれているのであろうか。次の和歌を通して検討してみることにする。

3、窮状を訴えるもの

29葵　いまもなをふたばなりけりあふひ草かけしむかしのおもがはりせで

99別　あぢきなく人やりならぬわかれぢにねてもさめてもみやここひつゝ

102懐旧　おもひしるまぼろしのよのむかしのみなをこひしきぞいやはかなゝる

29番歌では、「ふた葉よりわがしめゆひしなでしこの花のさかりを人に折らすな」（後撰集・夏・一八三・読人不知）のように幼児の比喩として使われる「双葉」から、子ども（為相や為守ら）の姿を思い出している歌と言えるだろう。これらの和歌に共通するものは、京にいる家族や思い出を懐かしむ心情である。このように恋しく思う京からは離れた地であることから、いっそう懐かしさが増し、次の和歌のように詠んでいる。

20喚子鳥　花ちりて人めまれなるさびしさにわれをとづるゝよぶこ鳥かな

30郭公　かたらはゞ都になれしほとゝぎすたびのそらにも友とたのまむ

50雁　たまづさをかけても人はしらじかしげにかりのよはかりとなけども

62初冬　木がらしのこゝろぼそさもかねてよりおもふにまさる冬の山ざと

67寒蘆　をく霜に人めばかりはかれあしのしたねかはらではるや待らん

「人めまれなるさびしさ」（20）「人めばかりはかれあしの」（67）というように人の訪れが少ない寂しさや、30番歌では旅の空であるために時鳥と都について語り合うしかなかった。また、50番歌では手紙を書いても人は知らないと嘆き、62番歌では、よりいっそう心細さを感じるという。これらは、家族と別れて遠く鎌倉の地にいる身であることからくる孤独感を詠んでいる和歌である。

41六月祓　さらに又なごりぞおしきあさのはにゆふしでなびく夏のわかれも

61九月尽　とし〳〵の秋のなごりをかぎりなくおしむこゝろぞながつきの空

76歳暮　おどろかで猶いつまでとたのむらんふりはつる身にとしのくるゝを

これらは時の流れを惜しむ心を詠んだものであるが、鎌倉へ着いてからさほど時が経っていないためか、『阿仏五百首和歌』の弘安四年以降に詠まれた百首[14]と比べて、歌数や表現からそれほど深刻な焦燥感は感じられない。

53霧　都をやいとゞへだつるあしひきの山かさなれる秋のゆふぎり

98旅　えぞしらぬならはぬ旅のくさまくらあらしのとがにいまいく夜とも

53番歌は藤原定家の「いまこえしおもへばとほき故郷をかさなる山の秋の夕ぎり」[15]（拾遺愚草・二三一七）に拠るもので、京を隔てる秋霧を詠んだもの。98番歌は、旅人が嵐によって閉じ込められるように、「あらしの咎」によって慣れぬ旅路にあることを詠んでいる。これらは、京への思いを霧や嵐に隔てられているという閉塞感を詠んだものであろう。

31昌蒲　ひく人のあらましかばなあやめぐささのみしたねのみだれやはせん

45薄　しのすゝきしのぶとすれどくるしさを思かねてやほにいでにけん

52露　つゆの身のきえぬほどこそくるしけれをき所さへおもひみだれて

69氷　やま川の岩まのこほりなにとしてとけぬおもひにむすぼゝれけん

31番歌は、人知れず思い乱れているということから助けてくれる人を求めている。これらの和歌は、「下根の乱れ」（31）「くるしさ」（45）「思ひ乱れ」（52）「解けぬ思ひ」（69）とあるように、阿仏尼の悩み苦しむ様子を詠んだものである。

17春雨　はるさめも身のみふりそふなみだにてしく〳〵そでのぬれぬ日もなし

47苅萱　あだにをく露もろともになみださへみだれてかゝる庭のかるかや

51鹿　しかのねにもよほされつゝ秋の夜はね覚のなみだせきあへぬまで

56月　うき身には月ならで又なぐさめもなく〳〵よゝの秋になれぬる

58虫　なきそふる虫の涙やあまるらむ露こそまされにはのあさぢふ

87暁　よをかさねゆふつけ鳥にさきだちてあかつきをしるわがなみだかな

これらは、「身のみ降り添ふ涙」（17）「涙さへ乱れてかかる」（47）「涙せきあへぬ」（51）「泣く泣くよよの」（56）「泣き添ふる」（58）「我が涙」（87）とあるように、涙する自身の姿を詠み込んだものである。[16]

21苗代　さぞかしななはしろ水にみしめなわひき〳〵かはる人のならひも

104無常　思へかし水のうたかたあはれみなありとみる〳〵きえやすきよを

「引き引き変はる人の習ひも」（21）「消えやすき世」（104）とあるように、人や世の無常を嘆いている。しかし、一方で、

95関　心こそ身のせきもりとなりにけれやすくいづべきこの世なれども

100山家　たづねいるかた山かげのしばのいほしばしうきよもいとひかねつゝ

とあるように、たとえ憂き世であろうとも、それを見捨てることもできない心情を詠んでいる。

以上、様々な窮状を詠んだ和歌を見てきた。これらは、苦悩が深ければ深いほど、神仏の功徳が大きいとされる熊野信仰によるものと思われる。いかに現状がつらいものであるかを訴えることで、そこから救い出されることを願っているのである。加藤隆久氏が「『神道集』の構想は、内容が残忍であればあるほど、またその苦悩が深ければ深いほど、最後に念ずる神仏の利生が効果をもたらしたもので、これが熊野信仰の威力を庶民に与えた一つの要素となったのである」[17]と述べているのも、この辺の信条を伝えているものであろう。

孤独感を詠んだものでも帰京し家族と出会えることを、閉塞感を詠んだものでもそこから抜け出せることを、また、辛苦や嘆きを詠んだものでも明るい未来になることを、それぞれ願いを込めて訴えたものと思われる。

終わりに

本稿では、まず歌枕を通して熊野信仰を検討し、当該百首の奉納先は鎌倉の「今熊野」であるが、熊野大社参詣（紀路）を想定していることを確認した。また、遠隔地からの祈願成就を願うという信仰も確認できた。

次に、祈願内容を通して信仰の有り様を検討した。歌道家に対する思い・望郷・孤独・時間経過・閉塞感・辛苦・涙・憂き世・執着心など様々な和歌を検討したが、そこには窮状を訴えることで、神のいっそうの利生を得ようとする態度が見て取れる。「現当二世の安穏」つまり現世安穏と後生善処を対象とする熊野信仰であるが、阿仏尼の場合、当該百首の内容から、あくまで窮状を訴えること、すなわち現世安穏の方に重きを置いていたということになろう。

［註］

（1）五来重氏「紀路と伊勢路と」、加藤隆久氏「熊野信仰の発展と熊野三山」（『熊野三山信仰事典』戎光祥出版・

一九九八年）などによる。

（2）当該百首は「いまくまの、百首」と内題にあるが、本稿では「今熊野百首」と表記する。また、以下の当該百首の和歌本文は、『中世私家集七』（冷泉家時雨亭叢書31・朝日新聞社・二〇〇三年）所収の『阿仏五百首和歌』を私に翻刻したもので、和歌の上に付された算用数字は新編国歌大観番号である。

（3）冷泉家時雨亭文庫本『阿仏五百首和歌』は今熊野百首の端書き途中からしかないため、本稿では端書き及び跋文については、松平文庫本『安嘉門院四条五百首』（『松平文庫影印叢書16 定数歌・歌合編』新典社・一九九八年）を採用し、私に平仮名を漢字に直し、句読点を付した。

（4）「安嘉門院四条五百首と十六夜日記」（『国語国文』第31巻1号・一九六二年・一月。『和歌文学史の研究 和歌編』（角川書店・一九九七年）に収載）による。

（5）佐藤恒雄氏『藤原為家全家集』（風間書房・二〇〇二年）3208～3221（3217は歌欠佚）の十三首からなる歌群による。

（6）『万葉集一』（新日本古典文学大系1・岩波書店・一九九九年）による。また万葉集歌には旧国歌大観番号を使用している。

（7）五来重氏「紀路と伊勢路と」（『熊野三山信仰事典』戎光祥出版・一九九八年）による。

（8）以降に挙げる勅撰集歌に関しては、「新日本古典文学大系」（岩波書店）による。

（9）「熊野信仰の発展と熊野三山」（『熊野三山信仰事典』戎光祥出版・一九九八年）による。

（10）これらの和歌に対して、森井信子氏は「安嘉門院四条五百首について」（鶴見日本文学2・一九九八年3月）で、「和歌の道を引き継いでいこうとする意志が顕著に表れている歌」として挙げている。

（11）『冷泉家古文書』（冷泉家時雨亭叢書51・朝日新聞社・一九九三年）に所収。

（12）『俊成五社百首』や『為家七社百首』のこと。

（13）福田秀一氏が「阿仏尼の信仰」で、「祈願の歌や（省略）訴嘆調の歌が、雑題のみならず四季題にも目立ち、阿仏が彼女なりの心身から祈願して詠進した歌群であることは疑いない。」（『国文学解釈と鑑賞』一九九二年一二月）と述べられている。

(14) 鎌倉に着いてから「みとせ」にあたる弘安四年以降に詠まれた新賀茂社百首・新日吉社百首・鹿島社百首のこと。

(15) 『新編国歌大観』（角川書店）による。

(16) 17、47、56を含む今熊野百首の九首の和歌に関して、森井信子氏「安嘉門院四条五百首について」（前掲）に「『涙』やそれに類する『雨』『露』が題に導かれて多用されていること、『くるし』という語が目立つことが注目される」と指摘している。

(17) (9)と同じ。

（ふくどめ　たまみ／本学大学院生）